



## ミクロ経済学入門の講義を終えて

神戸大学 経済経営研究所  
非常勤研究員 福田 勝文

4月から7月末まで、京都のある大学で、非常勤講師として文学部の教員採用試験を受ける学生に2単位のミクロ経済学入門の授業を担当した。ミクロ経済学を教えることは僕にとって初体験だったので、どのような授業にするのかを考える上で僕自身のこれまで受講してきた授業や学んだことのある教科書を振り返ることから始めた。例えば、中学生の社会の授業時に、唐突に以下の2つの概念が出てきた記憶がある。りんごを例にとって話を進める。りんごの価格が与えられたときにどれぐらいの量を購入するのかを表す需要関数と価格が与えられたときにどのぐらいの量を生産して市場で売ろうとするのかを表す供給関数が出てくる。もう少し具体的には、皆さんがお店でりんごを買おうと考えているとしよう。りんごの値段が100円だったら、2つ買おうと考えているが、200円に値段が上がると、りんごを1つ買おうと考えるといったようなことを需要関数は表している。逆に、りんごを作っている農家を考える。りんごの値段が300円だったら、3つのりんごを生産しようとするが、値段が200円だったら2つのりんごを生産しようと思っっているし、値段が100円だったら1つのりんごを生産しようと思っっているといったようなことを供給関数は表している。これらの2つの関数を用いて価格が300円だと、供給が需要を上回り、品あまりが発生するのでりんごの農家は価格を下げようとする。逆に、りんごの価格が100円だと、供給が需要を下回り、品不足が発生するのでりんごの農家は価格を上げようとする。その結果として、需要と供給がちょうど等しくなるようなりんごの価格が決まるということを知った記憶があった。しかし、それらの関数が一体どのような前提から導出されるものなのかを中学校で教わることはなく、僕の経験では大学の授業で初めて知った。それゆえ、上記の2つの関数がどのようにして導出されるのかを説明することを取り扱う予定にした。テキストとして、入谷純先生と篠塚友一先生の『ミクロ経済学講義』（2012年、日本経済新聞出版社）を指定していた。

しかし、授業の開始前、具体的には2週間ほど前、ロナルド・ジョーンズ先生の連続講義の昼食時に、ミクロ経済学の専門家のある先生と偶然お話をさせて頂く機会があった。僕自身の授業がどうなるのか心配だったので、ミクロ経済学の授業を行うことを相談した。そのある先生のご経験から、上記の需要関数や供給関数の背後の説明を行うことは避けたほうがいいのではないかという貴重なご意見を賜った。これ以降、授業の構成を再度1から調整する必要があると思った。僕自身が学部生の時に何度も読んでいた西村和雄先生の『ミ

クロ経済学入門』(岩波書店、1986年)や今回の授業準備を進める上で初めて八田達夫先生の『ミクロ経済学入門』(東洋経済新報社、2008年)を読んだりして準備を行った。さらに、大学において経済学の授業を受けたことがない学生が対象なのでより入門レベルの中谷武先生と中村保先生編著の『1からの経済学』(碩学舎発行、中央経済社発売、2010年)や安藤至大先生の『ミクロ経済学の第一歩』(2013年、有斐閣ストゥディア)やマンキュー先生の(足立英之先生+小川英治先生+石川城太先生+地主敏樹先生訳)『マンキュー 経済学(1) ミクロ編』(東洋経済新報社、2005年)などを参考にしてより初歩的な内容に切り替えた。具体的には、需要関数や供給関数などの導出を行わないことにした。第1に、分業の利益、第2に、図を用いて、需要曲線や供給関数を説明した。第3に、財の性質による需要関数の形状の違い、具体的には米のような食料品は価格が変化しても大して需要量が変わらないような財と高級車といったような価格が変化した場合に需要が大きく変化するような財の違いを需要関数の違いを説明した。第4に、米の場合、価格が仮に非常に高くなってもそれほど米の購入量は変わらない。このことを用いて、米が大量に生産できた場合、その作物を農家自ら廃棄してしまうということは需要量をそれほど下げることなく、価格を増大させることが出来るので結果として農家の収入を増大させるための行為であることを説明した。第5に、市場に非常に多くの生産者がいる場合と1つの生産者のみが存在する場合の望ましさの違いを説明した。最後に、中古車市場の説明を行った。

学生に授業で印象に残ったことは何かを受講生に伺ったところ、豊作貧乏や中古車市場や多くの生産者がいる場合と1つの生産者のみが存在する場合の違いが多数を占めていた。少数の意見として、先生の授業中の雑談というものもあった。

受講生は新入生が多く、大学の授業に不慣れな学生が多数を占めているため、授業中に学生の私語が教室で飛び交わないように以下の点を実行した。受講生が90人程度なのにに対し座席数が100人の教室だったため、学生にとって窮屈そうに思えたので座席数の多い教室に変更してもらった。また、学生の理解をチェックするために、授業中に前の座席に座っている学生を指名して質問を行ったりした。また、トピックごとに宿題を出すなども行った。

ミクロ経済学を講義する初めての経験だったこともあり、当初予定していた授業とはかなり異なるものになったが、授業後に質問や感想を頻繁に来てくれたりした。受け付けた質問や宿題の解説を次回の講義の冒頭に行えるなどを毎回出来たので、授業は行いやすかった。今回の授業の教訓としては、第1に、各テーマのつかみのお話が重要であることを認識した。突然中身の説明に入るよりも学生の集中力が高かったような気がする。第2に、図や言葉を用いた説明を十分に行った後に、計算問題を行ったつもりだったが、計算問題がかえって受講生の理解の妨げになってしまってその計算の解説に何度も時間を使うという事態になった。それゆえ、図や言葉のみの説明を行うことに集中したほうがかえって混乱が少ないと思われた。第3に、小鳥が授業途中に窓から教室に入ってきて、授業終了まで小鳥がさえずりながら教室中を飛び回るという予期せぬ事態に遭遇し、受講生に迷惑を

かけたので窓を閉めること。後期は同一の大学、同一の教室でマクロ経済学入門の授業を行う。マクロ経済学の授業も今まで行ったことはないので試行錯誤が必要であると考えているが前期の教訓を取り入れて後期の授業をよりスムーズに構築し、研究時間も確保したいと考えている。